

2019年度GTセミナー GTサミット2019 2019.8.19~8.20

第130号 2019年8月26日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていくよう
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢



GTサミット2019

2019年8月19日～20日にGTサミット2019が
東京都中央区のコングレススクエア日本橋にて開催しました。

全国から100名程の先生方が集まり、園見学や各地域実践発表、意見交換会等を2日間に渡り行いました。

外部講師として、中国で「見守る保育」の通訳で活躍されている
戒 夢婷様（ロン ムテイ）をお招きしました。

1日目 2019年8月19日(月)

- 10:00～ 園見学
13:30～ 講演 藤森代表（ギビングツリー代表）
15:00～ 講演 戒 夢婷様（ロン ムテイ）
17:15～ 意見交換会

2日目 2019年8月20日(火)

- 9:30～ 地域活動報告
12:00～ 昼食
13:00～ Q & A
16:00 終了

GTサミット 2019 基調講演

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さんこんにちは。まず、明日の質疑応答と言っても、興味関心が色々あると思うが、聞かないので欲しいのが、無償化になって、どうなるかを聞かないで欲しいです（笑）。わかったことがあったのが、中山さんが園長で、私がどうも主任で、興味を持って保育を話しているので、制度的なことを聞かれても分かりません。ただ役員と話していたが、制度やハード面などについては、何がいいかは議論しやすい。一番の課題は、長い間あるのが質をどうするか。無償化になって給食費はどうかと同時に、無償化になって、保育の質はどうかは同じくらい大事。ですけど、答えが出にくい。何が、どうなのかがとても出にくい。それぞれが検討会を持っているが、行き詰っている気がする。それぞれの立場があり、研修者の立場があるし、研究手法としては知っている。

—研究者の研究—

去年から話しているのがハリスを知った時に、常々考えていることと同じことを話している。ハリスは、ハーバード大学に入った時に、研究をする中で、生命体はどう行動を起こすかの研究をしている。具体的に言うと、ハトを使ってスキナー派といって、研究をしていた。報酬を求めて行動を起こすという結論を出した。結論がハトを巣箱に入れて、スイッチを押すとトウモロコシを与えるという行動を起こすという研究を発表した。ハリスは生命体の行動といっても、その生命体が集団で生活する種と、単体で行動する種とでは違うのではないかと言った。ハトは集団で生活していたのを巣箱に入れて、スイッチをつつくかの研究は、実際とは違うのではないかと言ったら、大学界では大騒ぎになった。集団における行動の研究はされていない。児童心理学があるが、有名なのが赤ちゃん学会だが、実際に赤ちゃん研究をするが、小西先生が同志社大に移りました。最初、東京にある女子医大で研究をしていた。なので、うちの園児も研究に加わったことがあったが、その後同志社大学に行って、赤ちゃん学会を立ち上げて研究をしている。一度、小川先生と尋ねたことがあった。そこで赤ちゃんを実験する研究室を見せてもらった。ディスプレーがあって、赤ちゃんがどういう反応をするかを研究して、お母さんとの過ごし方を研究していた。実際に研究している人でさえ、そういう研究をしているが、ハリスがハトで感じたように、実は私は常々人類は社会の中で人の中で生きている生き物で、赤ちゃんを単体で研究して、何をどうするかの研究をしても、違うのではないかと思っていたが、どうしても一つはそういう研究です。もう1つ保育の大学の先生を見ると、靈長類研究にしてもそうだが、チンパンジーが数を数えられるが、研究所の中で飼っている。何匹か飼って実験をしている。実際に昔、地域に蜘蛛の研究をしている人がいて、小学生たちと訪ねたら、部屋中に蜘蛛がいて、玄関にゴキブリがいてエサにすると言っていた。それに対して、保育の大学の先生を飼うと言ったら変だが、どうやって子どもを知るのだろう、個人的に批判ではないが、大豆生田先生と仲がいい。講演をして、人がいいし、立派な人で個人的に仲もいい。実際に大学を出て幼稚園の先生になり、現場で教えて、子育て支援で論文を書いて大学へ行った。最初、子育て支援の話だった。初めてお会いしたのが、子どもの城で私が、小西さんと子育て支援の話をした時に参加者として会場にいた。それがいつの間にか、乳児の専門家になっている。どこで知ったのだろうか、どこで経験をしているのだろうかと不思議。大学の先生の凄さ。大学の先生は研究手法を知っている。忙しいので論文を書かないといけないので、調べて論文を書く。私が教授向きでないことに気付いたのが、教授たちが出本のステータスは、参考文献が多いかどうか。私は考えたことを書くので、参考文献がない。いかに参考文献が多いかで評価され、研究者なので当然。ただ私からすると、昔の論文が使われている。また講演している回数が私は多いと思う。大学の先生はいかに学会で発表したかで、研究発表の回数の評価なので、研究者は研究者。新しい理論を打ち出す

人ではないことがあると、その分野はその分野だが、実際は私たちは現場を持ち、子どもを毎日見ているのに、大学の先生の研究を優先して、勉強てしまっている。見解はいいが、すべて正しいのだろうか。何とか信仰と言わることにハリスが抵抗したのが親信仰。親が子どもにとって一番いいということを、何とか打ち消そうと頑張るが、基本的に根拠がなくて、ある研究者が出した。昔からある3歳児神話。何の根拠もないのに、3歳児神話と名付ける。うちの職員が幼稚園の更新研修に行った。大学の先生が、「赤ちゃんはお母さんが一番いいし、愛着が大事だから親のそばにいないといけないのに、それが最近酷くなっているのは、保育園があるからだ」と言ったそうです。

—キーワードは「9」—

私は今日、うちに見学に来たかにお話ししたが、子どもに対する理解がどんどん変わっている。変わってきたのは決して、子どもが変わっているわけではない。その見方・研究手法が変わってきている。私たちの現場で、赤ちゃん学会や保育学会で子どもがいろいろな姿をしていると、赤ちゃんからこんなことをしていると発表すると、大学の先生は、エビデンスがないという。子どもの姿が証拠だと言うがデータというが、ハリスは、「思った通りに解析すれば、その通りになる」と言っています。データが正しいのではなくて、分析の仕方によって、どうにでもなるという中で、私たちは日々子どもを見ています。ですから、大学の先生は実践があって、それが研究手法なので、大学の先生の昔の研究を私たちに下すのではなくて、子どもたちの姿をあげて、研究してもらわないといけないと思う。私たちは役割があり、どっちがいけないではなくて、役割があります。私たちの役割は、現場があること、目の前に子どもを見ることが出来ること、ただ、その分析の仕方が違う。見学に方に話したが、それぞれの立場がある中で、それぞれの立場を共通したものとしないといけない。私が最近面白いと思っていることは、研究者は、横の違うことを見ないが、私たち現場は、私の『起源』の本を読んでもらうと、進化や社会学、住居学、色々な分野を見る。それぞれの人たちが気づいていないことを横断的に見ると、共通点が見えてくる。最近、私はうちの園の中山さんに話すことだが、興味を持っているのが数字の9。9でビット来た。その1つは例えば、トマセロという人が9ヶ月革命を提案した。これは、赤ちゃん学会の新しい冊子の巻頭言をトマセロが書いた。有名なのが『人はなぜ協力するか』を書いていて、トマセロは、「人類は超社会的生き物だ」と提案している、社会を生きる人と提案している。9ヶ月革命を提案し、赤ちゃんは9か月になると、他者を意図を持った人として認識するのが、9ヶ月くらいと言っている。ボタンを押すということが昔、新聞出ていたが、久しぶりに見たが、赤ちゃんは目の前でボタンを押すと赤ちゃんも押す。その相手がボタンを頭で押すと、ある瞬間赤ちゃんは、何で頭で押したのかを考える。その時に相手がその新聞では、手を出せない服を着ているので頭で押したと理解して、あの人の意図はボタンを押したいが、手を出せないから頭で押したのだと理解して、瞬間真似して手で押す。それを相手が手ぶらで頭で押すと、あの人は頭で押したいのだと理解して真似をするのが9ヶ月で、他者の意図を理解して、これが9ヶ月革命と言われ、他者の意図を理解する。例えば、私の園で職員が0歳と一緒に食事をする。それは、食事をするのを見ることで、自分で食事をするようになる。共食の中でお互いを知る。昔から不思議に思っていたのは、見本で食べるなら、赤ちゃんが使っているスプーンを使って、真似しないと食べないんだろうと思っていたが、意図を理解していて、先生が箸を使って食べるというと、赤ちゃんは物を食べたい、自分は箸を使えないが、スプーンやフォークを使って、物を食べたいので真似してスプーンやフォークを使うことを真似できる。この真似をそう考えると、意図を真似しようとする。真似をとっさに出来ることが凄い。一時期、写真で見せていたが孫が小2になったが、1歳の時によく眉間にしわを寄せていて、みんながじじの真似をしていると言われたが、冷静に考えると私が眉間にしわを寄せてる顔を見て、自分は何もしないで、どこをどうしたら眉間にしわを寄せる真似を出来るのか、どこの筋肉を動かすかをどこで知るのだろうかと思う。新生児模倣と言って、舌を出したら舌を出すという行為、どこに舌があって、筋肉を動かす、胎児でさえお母さんが舌を出すと舌を出すそうで、どうやってわかるのか。どんどん広がり画期的だったのが9ヶ月革命ということが1つ。2つ目は、人類の進化の過程を

読んでいると、人類は、二足歩行をすると足が遅くなるから捕らえられ、エサになる可能性が高い。生まれてからある年齢になるまで出産が出来ない。何で未熟な期間を長くするかというと、遊ぶ期間を長くして、遊びが大事でこの期間を長くしたかった。そして、いろいろな機能が発達する中で、生殖器は後で発達する。生き物は、生殖することが遺伝子を残すことなので、割と早く発達させるが、人間は遅く発達させる。それまでは生殖するところにエネルギーに使わないで、遊びに使わせるためと言われています。遅く出産し始め、終わりも早いですね。チンパンジーは死ぬまで出産できる。短い間に獲物として捉える可能性もある、出産で死ぬ可能性もあるため、いっぱい生まないといけない。人類は毎年生むという、いわゆる年子。チンパンジーでさえ4歳下、オラウータンは7つ下。人類は、一つ下だと年子。私の妹も年子。次の年に生むには二つ問題が起きる。一つはお母さんがいつまでも授乳をしていると生理が起きない。時間を決めて授乳をしていると大丈夫だが、赤ちゃんが欲しい時にあげていると、赤ちゃんがいつ欲しがるか分からないので、授乳をしている間は生理が起きないで、次の子を生まないようにしている。次の子を生むためには、離乳しないといけない限界が9ヶ月で、離乳してお母さんの膝からおろしている。そうすると、お母さんから9ヶ月で離された赤ちゃんは1人で生きていい。離乳は済んでも、一人では生きていいので人類が取った方が共同保育と言って、社会を作り、家族を作り、共同で保育をしていく方法を取ります。そうやって、社会を作っていきます。赤ちゃんは、9ヶ月で共同保育をされ、集団の中に入れられていきます。トマセロの9ヶ月で他者の意図を認識し始める頃と、集団の中に入れて他者の意図を認識しないといけない時期と一致する。だから、こういう力が9ヶ月から付くのだと繋がる。進化から見ても、9ヶ月革命は意味があるのだと思います。指針の改定の時に出されたのが、脳の感受性がどう発達するかの中で、最も早かったのがエモーショナル・コントロール（我慢する力）。感受性が高い時期が9ヶ月、我慢や自分で感情をコントロールするのは、集団の中に入れられることで、他者を認識・意図を理解するから、我慢するのだろうということと9でつながる。言った本人たちは繋げているのだろうかと思うが、そういうことを思って、現場で撮った写真を観ると赤ちゃんの活動は面白い。赤ちゃんとべったりくっついていたら見られないが、この3つを加えたときに、最近、アメリカで事件が多いのは、エモーショナル・コントロールという、自分の感情を抑制する力が減ってきてるので、若者の事件が多いということで、その脳が発達していない。発達する条件は、共同保育をしないといけないので、されていない。その時期に母子だけで過ごしていると考えたときに、人類は9ヶ月くらいから集団に入れられ、社会に出たときの力をつけています。現象としては、我慢できなくなっていることが起きていると、共同保育されていないだけでなく、子ども集団がない。

—共同保育—

うちの園での動画だが、2つやってみて1つは先生にすぐ抱っこをせがむ赤ちゃんだが、先生を見ると抱っこという。この赤ちゃんを最初見たときに、自分で感情を抑制するのは、共同保育をしているとこういうことがわかった。赤ちゃんが抱っこというが、ボタンを押すのと同じで、いつでも抱っこできる状況だと、抱っこというが、その先生が抱っこできない状況だと我慢する。最初はちょっとのぞくが一つ目がそれ。抱かれたくて泣くが、二人抱っこされているので無理だと、自分でこの赤ちゃんは泣き止んだ。他の赤ちゃんを下ろすまで待っていようと、自分で本の所に行って見始めた。家だったらこんなことは起きない。これを観たときに、自分で我慢する力を集団の中で付けるのだと思う。今度は抱かれている赤ちゃんを見てください。抱かれたがっていることを分かっているが、先に自分は抱っこされているので、泣いているのを見て、抱かれたがっているけど、目をつぶってみない。優先席に座っている若者ですよね。こっちの意図を理解した。こういうのは集団の中である。そうすると、これは今年ドイツへ行って衝撃だったのが、オープン保育をしている。どこへ行っても、どの先生の所に行っても自由。0~6までの園に行った。私たちは345が異年齢ですから、ある人が質問をした。「ブロックを赤ちゃんが崩したら、どうするのですか?」と聞いたら、「壊されることは、社会に出たらいくらでもあります、壊される経験をどう対処するか、壊されたくなかったらどう工夫するか、もう1回作るかを考えるのが学習です」と言った。日本は守り過

ぎてきた気がする。世の中で止めてくれる人はいない。子どもはそれを分かっていて、壊されたときに「どう思いますか？」と年長に聞いたら、「わざとだったら怒るけど、間違って壊したら、今度から気を付けてね」と言っていて、立派な答えだと思ったが、何でかを聞いたら、「年中の時に自分がそういわれて嬉しかった」と言っていた。それが子どもの文化で、伝承されて集団の中で起きる。集団はストレスが起こるが、その時期の経験が少ないのである。もう一つ、うちの看護師と話をしていて、噛みつきだが、どの園でも噛みつきの相談をされる。皆さんの園で噛みつきがあった時に、何歳で噛みつくかですね。これは最初、看護師も不思議がっていた。1歳で流行る園、2歳で流行る園、幼稚園では3歳で噛みつくらしく、うちの園では0歳が多い。3歳だったら噛み切ってしまうと思った時に、発達で噛みつきで起こると言うが、全員するわけではないし発達ではない。集団の時のストレスだと思う。うちの園は、0から集団をさせるので0歳で噛みつきが多い。色々我慢するので、1歳で起きない。1歳から始めて子どもと触れる園では1歳で起こる。それが2歳だと2歳で起こるように、集団の中は、そう楽ではない。親の元で好きなようにやって来ている。でも、世の中出たらそうではない、どこかで経験し、乗り越えないといけない。どうも最近は守られ過ぎている気がする。怪我に対しても菌に対してもそう。守ることが、子どものためと思っていることが多い気がする。もちろん、乗り越えられないことをするわけではないが、集団の中の学びとして、体験させることは大事。9ヶ月を過ぎた頃からは、集団があることによって、社会に出たときに意味があるのでないかということがある。そう思ってみると、大学の研究を見ると、基本的に子ども同士がない。「見守る」という言い方をすると、反対する人が質問で、「どこまで見て、何処から介入したらいいか？」と質問されたりするが、それは先生と子どもの関係で、その途中に他の子どもが入らないかということです。「見守る」のは、先生が手を出すか、出さないのでなくして、子ども同士の関わりをさせるために、見守ることもあり得る。放っておくとかの議論ではなく、子ども同士で放っとかない子がいる。

—人類の進化から保育を考える—

最近、外国に行って「見守る保育」を提案する中で気づいた一つの特徴なんです。ホモサピエンスがどう生き延びてきたかを考えると、社会を作り、助け合う。分け合うことから、私たちホモサピエンスは生き延びてきた。人類がそういう力を持っていた。欧米の人たちは協力というよりも、個人でどう自立して、生き延びていくかを優先で考える国。そのカリキュラムが多すぎる気がする。私は、日本から提案するのは必然だと思っている。日本は最も最近まで、残っていた国だと思います。私は日本が残っている国だと思っていますが、最近の子どもで気になるのが、例えば、散らかっているのを、片しなさいと言うと、自分は使っていないとか、ごみを片しなさいと言うと、落としていないと言うが、これは先生のせいだと思う。片づけさせるときに、自分で使ったのだから、片しなさいと言うが、そうではなくて、部屋がきれいになると気持ち良いから、片付けようとしないと、誰が使った、使わないではなく、片づけるのが日本人と言ったら変だが、日本で、本来人類がもともと持っている力。ジャレド・ダイヤモンドという人が、『昨日までの世界』という本の中で、人類の子育てを見直そうと提案している。ほとんどが日本でやって来た項目。抱っこや、おんぶの中に、赤ちゃんの中から集団にいれるということを提案している。そういうことがあって、人類は集団で生きている生き物を、単体の研究に惑わされている気がする。単体の研究に関わるのが大人。中々その辺りが難しい。ジャレド・ダイヤモンドが新しい保育・新しい育児を提案している。今まででは、国家主義の西洋化の中で考えられた方法。さっき言ったように、今までの保育カリキュラムは、西洋のカリキュラムが多い。伝統的社會の中の育児方法を見直すべきだと、心理学の弊害、フロイトに惑わされるのではなく、進化の中で子育てしてきた方法を見直すべきだということを提案している。これが、10何項目ある。一つ目が、乳児に複数の成人とスキンシップさせることを人類がしてきたこと。これを一人というのは、どこからしたのか。乳児こそ複数とスキンシップを取る。その上で、優先順位を赤ちゃんが決めるが、昔は村中の人々に抱かれ、他者を認識し始めたと言われていた。もう一つが、離乳を遅くするのは、フロイトは心理学で提案されているスッポク博士の育児書は、2ヶ月で離乳しろと書かれている。いつまでも母乳を飲ませていると、赤ちゃんは性的欲求

を持つてしまうからというが、簡単に言うと、乳首を舐めていると、大人になっても舐めたがると言うが、そんなことあり得っこないが、あの頃は、2ヶ月で離乳しなさいと言っていたが、人類はもともと9か月くらいでしていた。添い寝も、ヨーロッパでは、一人で未だにさせる。それから、乳児を抱き抱え、正面を向かせる。これをいつかだけは、向かい合えと言って、ベビーカーをこっちに向かせた。今は変な人が居るので、後ろで何をされるか分からないので、抱っこがいいという説もあるが、前向きに抱かせた方がいい。次にグループ育児を増やす。ダイヤモンドも知っていると思うが、共同保育をされてきたのでグループ育児。子どもの泣き声にすぐに反応する、子どもが泣くことは、何かを訴えている。すぐ反応する、1つは危険かどうか。お腹が空いているのか。それから体罰を避ける。いまだに意味があるという人が居る。子どもに自由に探検させる。子どもから目を離さないようにだが、最近の研究では、探索活動は将来のためも下見で、遊びの一つで探索活動をしていたと言われているが、そうではなくて、遊びのための一種類ではない。探索活動が大きいほど、次の遊びが豊富になる。探索距離が多いほど、危険回避やケガをしない、というのは、移動が多いほど、深度を（深さ）知ることが出来ると研究されている。異年齢の子どもの遊び、小さな子どもにも、大きな子にも効果がある。出来合いの玩具ゲームではなく、自分たちで楽しむ方法を学ぶ、これが最近話そうと思っている自由遊びの大切さ。大人がルールを決め、ある遊び方を指示する遊び方は、子どもにはよくない。自分の発想で楽しむ方法を知る遊びがいいと言われています。ブラウンという人が有名だが、アメリカで殺人をした人たちの共通点は、自由遊びが少なかった子どもが多かった。はっきりわからぬが多分、煽り運転で捕まった人は、いつも親から勉強しろとコントロールされ、好きなように遊んだ時間が少なかった気がする。最近の子どもは、自由遊びの時間が減って、教育的な玩具や、大人が意図したことの遊びに誘導されている。ダイヤモンドを見ると、一つずつ証明されている。それと私が提案していることに近い。改めて見ると参考になる。私は、これをダイヤモンドに指摘したが、最近までしていたのが日本人で、今こそ、ヨーロッパからアジアの子育て観に戻すべき、それからニュージーランド、オーストラリアのマオリ族の子育て観とか、もう一度見直そうという動きが、大きい。ニュージーランドのテファリキは、織物という意味だが、元々の先住民族マオリ族と今の新しい考え方を織り合わせたという考え方で、昔からマオリ族は、子どもは自ら学ぼうとした意志を持っている、と昔から言われているように、何故かというと当然です。長い歴史の中で、間違った育児方法をしていると滅びてしまい、淘汰してきた。長くやってきたことに意味があったのではないか。新しい科学的なことが研究がされるから、新しい価値観を生み出した。これまでの育児は違っていたと出しても、科学は昔からやってきたことを証明するのが科学で、新しいことを出すことではない。というようなことがあって、赤ちゃん研究や赤ちゃんの育児を見ると、担当性の様な一人の人が付きっきりなのは、人類はしたことが無かったと思う。何でその理論が出たのが変わらない、ボルビーもそんなことを言っていない。負の状況の時に駆け込める場所として愛着存在が必要で、外で色々な人に出会い、いろんな人の中で生きていく。そのために不安に陥った時に、お母さんいるんだという存在が愛着です。一緒に遊ぶとかではないです。ですから、途中から新しい理論が出されるが違っている。現場を見ていると、違うだろうに、ということがある。赤ちゃんはその環境で生きていかないといけないので、担当性だと、それ以外の人に不安になります。なので、担当性がいいねと言うが、一人で面倒を見ていたら、他の人を不安に思う。赤ちゃんが社会に出て、いいのとなる。色々な人に接する中で、体験を積み重ねることも大事だと思います。私たちは現場を見ると、色々な分野を知ることで9ヶ月だと分かる。何で他者を認識し、我慢しないといけないかというと、社会を作らないといけない。もう一つ分かったのは、個人が小集団で集まつたものが家族。その家族が集まつたのが社会。京大の山極さんは、「家族と社会は利益が相反することがある。これを両立できるのが人類だけ」と言っている。霊長類研究をする中で、ゴリラは家族を作れるが、社会は作れない。チンパンジーは、社会は作れるが、家族という形態は作れないそうで、両立できるのが人類だけ。両立する力が共感力と言われている。人類は共感力を持っています。これが、他者を意図を持った存在と認識できるのと同じことなので、共感できる。自分の利益を我慢してまでも、相手を優先できる。共感力をどう身につけたかというと、山極さんはお互いを白目を見ることで、相手の気持ちが伝わってくる。言語による伝え方は、言葉は伝わるが心は伝わらない。

ラインやツイッターなど、よそ見をしても言語的なものは伝わっても、共感力は伝わらないと言われている。白目で見れる距離で話すと伝わるが、白目を見て話すことが減ってきてている。お互いが共感しなくなっている。

—総合学問の保育—

もう一つ最近、経済学の新聞の記事で面白かったのが、受容と供給で決まってくる。例えば、宿泊代を受容と供給で価格を決める。来年のオリンピックでは、1泊5万円と高くなる。希望者が多いと高くして、少ないと安くするもあるが、利用者からすると、経済学的には理にかなっているが、利用者としてすし屋で時価と書いているものを頼む勇気。価格が言わないと、選択することに勇気がいる。経済学的には分かるが、人間は受容と供給ではなく、相手に対しての共感力で物を買うのではないかと、スマスをよく読んでもそう。最後に共感力に来たかと思った。そこにはコンピュータは入りきれない。価格設定が全うに見えるが、人を幸せにするか。2回目もまた面白かった。美人投票説と言って、最近は自分の気に入った服は買わないそうです。メリカリで売れる服を買うそうです。多くの人が気に入るかで買うそうです。自分の好みに投票するのではなくて、一般の人は、どの人が美人だと思うかを考えて投票する説で、経済学も面白いと思っているが、保育の世界は色々な学問が総合されている職業だと思う。逆に面白い、色々な分野を見ることで面白い。私たちは、広い世界から現場の子どもの姿を見て、新しい保育を提案していくように、一番の課題は、子ども同士の関わり、子ども同士の集団、赤ちゃんからどうしていくかだと思う。赤ちゃんからの自由遊びの保障だが、最終的に3歳児神話ではないが、保育園の存在意義だと思う。子ども集団を持っていることが、とても強みですね。これを早く国に知って欲しい。私たちがいかに3歳から入園した子が大変かですね。3歳まで家にいると、昔と違う。家にいても、色々な人の中で抱っこしてもらっていたが、3歳からは認知的なものがあるが、今は3歳まで母子だけです。危険なことは止めてしまい、脳のセンシティビティを見ても育たない。保育園の最初の成り立ちは就労支援です。子育てを出来ない人の代わりだったが、子どもの育ちにとって、社会を担う子どもたちのための施設ですね。幼稚園にみんな0からやって欲しい。競争原理から言うと、やってもらわぬ方がいいかもしれないが、そうではなくて、乳児から必要なのだということです。熱が出るとか、職場で嫌味を言われるが、そういう意味では、育休を取ってもいいと思うが、日本では育休を取ってしまうと、入園できない。それとは別物で、子どもにとって必要な施設で、家にいようが居まいが、集団の中に入れるべきだと思っています。現場の実践から、子どもの姿から発表していくことだと思います。

—「見守る保育」の本質—

シンガポールや中国が「見守る保育」をどう捉えているか。日本人より、本質を捉えているなと思うことがある。中国のおむつメーカーから電話が来た。保育のコンサルをしているところだが、中国語の「守護」は「見守る」の訳だが、「守る」がどういう意味かを私の考えを捉えている。「守る」を3つの意味で捉えていて、1つは、自然と命に対する畏敬の念を守ること。私の園の「共生と貢献」の共生。2つ目は、愛のための生まれた心。3つ目は守るために専門性がいるんです。おむつメーカーですから、こういう言い方をしているが、しっかりした専門性がいる。ただ保護すればいいということではない。この3つを守るということで書かれている。もう1つ、このおむつメーカーが、「見守る」を紹介している文章があります。

「Calan Kuma シリーズの研究開発とデザインは、現在日本の東京都新宿せいが子ども園園長、保育環境研究所 Giving Tree 代表である藤森平司が提唱する、「見守る保育」の概念に基づいています。子どもの発達過程における課題に従い、子どもの成長のあらゆる細部に注意を払い、そして世界を探求し、近くするために子どものたちが自発的に、そして積極的にするために快適で高品質の製品を開発していきます。私たちは、信じられないほどの力を持っている自然と生命に対する畏敬の念を持ち、すべての子どもが生まれながら持っている能力を強く信じています。愛のために生まれた心である「見守る」を主張し、より良い製品をつくるために彼らのエネルギーを活用し

てください。」

という紹介です。これは私の許可もなく、許可もいらないと思いますが、許可すると不祥事が起きたときに責任が取れませんので、許可していませんと言えるが、どこで知ったかを考えたときに、日本で「見守る」にケチをつける人が浅く見える。これも中国で「見守る保育」をするときに水野さんが憤慨していたが、守護型保育と言うのが見守る保育。伝統的保育と守護型保育は違うというのは、伝統的保育は昔からの保育ということではなくて、中国で、やたら手をかけたりすることをやめて、「見守る」に行こうという哲学が、人と空間と物なんです。この3つの環境と言っても、日本はなかなか表さない。この前、シンガポールに行った時に、この3つから出しているところが多い。シンガポールでの紹介文。マイファーストスクールで「見守る保育」を紹介している文章です。

「子どもを「みまもる」とは、子どもを愛情と保護を持って見守る、注意深く観察し、ニーズを特定することです。時間が経つにつれて、子どもたちが自然に考えて学ぶ機会を持つように、子どもたちの社会的および身体的生態学を参考にします。これは、子どもに出来ないことは考えるか、与えますが、子どもの生来の能力を引き出し、育てるための保育アプローチです。」

と紹介されています。ある園のシンガポールの園の中で、保護者用に「見守る」とは何かを説明するものが貼ってあった。物と空間と人で表していた。これは別の園だが、これを観て感心した。人と物と空間。人は、ほとんど子ども。人を保育者と言ってしまうが、他の子ども。特徴がシンガポールは異年齢保育ではない。年齢別でやらないといけないと決められている。でも、私の話を聞いたら、異年齢の意味が分かって、決められていない範囲は、出来るだけ異年齢を始めた。靴とかも自分で履くとか、掃除を自分でするとか、ちゃんと区別を保護者に見せている。もう1つ、3つから説明しているところが少ないが、中国やシンガポールは3つが印象付けられているようです。ゾーンが私の園でも提案しているのが、ままごとゾーンではなくて、ロールプレイングゾーンと言って、345歳は、大人の社会のまねをする場所。2歳はままごとゾーンだが、向こうはロールプレイングとすぐにゾーンに名前を変えていた。具体的に言うと、ガソリンスタンドや、車を洗車したり、宇宙服を着ていたり、ロールプレイングとしてこういう場所がある。捉え方が広い。これもすごい、うちをモデルにしてか、拭く場所によって、雑巾の色を変えていた。セットでこれから開発したいと言っていたが、顔が汚れているかどうかを鏡で見て、ティッシュで拭いて、捨てるセットの物を開発していると言っていた。皆さんの園にいるかもしれないと、すぐめげてしまう人が居るが、そういう人用のグッズがあって手紙が入っている。直訳で訳したので役が変かもしれません、こう書かれています。

幼児教育者各位 あなたがしていることは素晴らしいです。私たちの小さな子どもたちのためのあなたの忍耐、そして時間と愛に感謝しています。子どもたちが今をよりよく生きるために！私は特別なグッズを手に入れました。あなたの日々を通して、そして私があなたに嬉しいことをあなたに知らせるために今日も私たちと共にあります。あなた、そして子どもたちの涙の乾かすためのティッシュペーパー。モノが少し荒れたり乱雑になったりするときのための濡れふき取り用品、時にはちょっとしたお菓子で、暗い日が明るくなることを思い出してください。ストレス解消して落ち着かせる必要がある時のためのお茶、心と魂！あなたのケアをしましょう、私たちの子どもたちのケアをしましょう。ありがとうございました！ステイシー女子、校長 マイファーストスクール 119 エッジフィールドプレーンズ

この入っているグッズをめげている職員に渡すそうです。こういう人が居るんだということです。こういう保育を始めたというのもきっかけで、親が囲み過ぎて、実は子どものためではない。私たちは現場から発信していく。中国でも環境セミナーをしたり、サミットも世界サミットだったり、1回目はシンガポールでしたり、中国の園長が来たり、こういうことは悩みが共通で出来たらいいなと思っています。夢というか、わくわくします。こういうことを発信する場所ですので、ぜひG Tメンバーには明日話をしようと思っていたが、麹町中学の校長の改革が、一つのキーワードです。親からの苦情に対して、親をお客にし過ぎて、一緒に子育てをする仲間、当事者であると

いう意識を持たせるべきで、当然お客さんだったら提供する。苦情するのではなく、どうしていこうかで、苦情にならない。GT会員が私たちに何かしてほしいではなくて、一緒に世界の中で発信していきましょうという、当事者意識を持っていってほしい。是非そういう仲間と、サミットで会った時にグループのリーダーになって、進めていったり、ヨーロッパから来ているカリキュラムからアジアから発信する。世界を幸せな国にしたい。助け合う、協力し合う。人類が生き延びてきた力を子どもたちにつけていきたい。自分だけ良ければいいというところから、脱して、自分たちが出来ることをして、尊重して、認め合う社会を作っていく。子どもたちを育てていくことを、各国でしていきたい。ぜひ皆さんも一緒に広げる仲間ですので、一緒になって色々な事をやって、実践例を発表して欲しいと思います。皆さんは決してお客様ではありませんので、一緒に創っていけたらと思います。シンガポールで凄いのがもう一つ、私たちがあまり取り組んでいない一つが、保育園は決まりがあるのでできない部分。学童での「見守る保育」。向こうは異年齢をしたいが、中々できない。ちゃんとマルチエイジングですので、ピーステーブルのシーンです。園内に貼っているほかの職員に対する「見守る」の実践仕方。親たちに学ばせることと同時に、職員同士でシェアをしている。先ほどは親用の掲示だが、これが職員用の掲示です。どういうことが「見守る」かを発表していました。子どもが配膳するというのも、向こうでは画期的らしいです。ピーステーブルに置く、心を落ち着かせるグッズ。テンションが上がっている子に使うと言ったが、ピーステーブルは心を落ち着かせるテーブルではなくて、自分の考えを人に伝える場所なので、落ち着かせることが目的になってしまうので、癒しのゾーンに置くべきで、ピーステーブルはあくまでも話し合いを目的にしたらどうかと助言した。あるブースで、私の実践を見てくださいと言われました。テンションを下げる方法はどれがあるかと、ルーレットでやっていた。1年半、2年も経たないうちに、シンガポールで始めています。これは本質を捉え、言葉尻を捉えてこれはこうじやないかではなくて、提案する本質を捉えています。すぐにこういう実践をしています。私たちがやろうとしている本質は何かを学んでほしいと思います。私からの提案として、お願いと私が何をしたがっているかのお話を最初にしました。この後も色々なことを学んでほしいと思います。私の話は以上になります、ありがとうございました。

本稿は、2019年8月19日に行われたGTサミット2019の講演内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿3-2-11 新宿三井ビルディング2号館10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、

QRコードからお願いします。